HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カルト問題と格差社会との関連
Author(s)	櫻井, 義秀
Relation	宗教と現代がわかる本, 2007. 渡邊直樹 責任編集. pp.140-143
Issue Date	2007-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35495
Type	book part
File Information	sakurai-2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

カルト問題と格差社会との関連

北海道大学　　櫻井義秀

１　性暴力とカルト

2006 年 2 月 21 日、京都地裁は女性信者（中学生以下）7 名への性的暴行に関わる罪で、聖神中央教会主管牧師であった金保に懲役 20 年を言い渡した。金は控訴せず、服役している。事件は、暴行を受けた少女達が仲間内で慰め合ったメールを親が偶然読んだことから発覚した。親達は金を京都府警に告訴し、2005 年 4 月 6 日に金が逮捕されたのである。

キリスト教会の聖職者が信者に性的暴行を加えたケースはまま仄聞される。おそらく、宗教界でも学校や職場といった世間並みにセクシャルハラスメントはあるだろうが、封印される傾向が強い。しかし、聖神中央教会の事件は牧師個人の悪癖を教団幹部が黙認していたという意味で一般の教会と同列に扱うことはできない。金は子供達に「これは祝福だ。断れば、かみのばちが当たる」と言い、幹部と一緒に複数の少女に「暴行はなかった」と念書を書かせた。既成宗教がカルト化した例として記憶されるべきである。

カルトの教祖が女性信者の性を支配する例は多い。アメリカの複婚主義者（モルモンの分派）や女性信者と聖なる結婚をしていたブランチ・ダビディアンの教祖デビッド・コレッシュ、或いは女性信者とタントラ秘儀と称する性行為を実践していた麻原彰晃がいる。

ここに摂理も加えられよう。2006 年 7 月 28 日から 3 週間ほど、朝日新聞は韓国のキリスト教福音宣教会（日本では「摂理」）をカルトとして批判告発した。教祖、鄭明析（チョン・ミョンソク）は韓国警察から信者の強姦容疑等で国際手配を受け、1999 年から 7 年間も海外逃亡中である。韓国・日本の被害者は数百名を下らないと言われる。現在も「五十大学に信者」をもち、「サークル装い勧誘」していると報道された。筆者の勤務している北海道大学も摂理対策に頭を悩めている。女子学生の保護は緊急を要する。この教団は、文化系・運動系のサークルを偽装し、サークルになじんだ学生にのみバイブル・スタディー「30 講論」を教え、摂理人と呼ばれる信者にする。正体を偽る布教活動は、統一教会の伝道方法が元信者から告発され、最高裁において違法であったとの判決を得ているとおり、許されるものではない。

摂理の教義は統一教会の『統一原理』をかなりの程度取り入れたものである。人間の始祖、アダムとイブは堕天使ルシファーにより誘惑され、成長以前に不義の性交を行い（元摂理信者のノートによれば、禁断の木の実を食べたイブは当時 14 歳であった！）、サタンと化した堕天使の悪の血統を受け継いだ。これが原罪の根とされる。そのため、神はひとり子イエスをメシアとして遣わしたが、人間の不信により十字架で生涯を終え、霊的救いのみを約束して天に昇った。そこで再臨主が現れ、堕落と逆のやり方で肉の救済も含めて完全な救いをこの世にもたらすことになった。これが救済の歴史、「摂理」である。

教祖が救済の秘儀として女性信者と性関係を持ちえたのは、神の種を受けた人間が無原罪の子孫を繁殖させ神の王国を実現するという特異な宗教観を教え込むことに成功したからである。実に、この教団も教祖の悪癖を幹部達は放置したまま、教祖のカリスマを利用

した教勢拡大に邁進したのである。聖神中央教会では、金が逮捕された後脱会者が相次ぎ、細々と教会活動を継続しているのに対して、摂理の教祖は依然海外逃亡中であり、信者は堅固な信仰を守っている。教祖の性的スキャンダルはメディアの捏造とみなされるらしい。

２　教説・教団の類似性と差異

前節では、聖神中央教会の主管牧師と摂理の総裁が女性信者に加えた性暴力を見てきたが、メディア報道も独裁的教祖、黙認する幹部、従順な信者という像に落ち着いていた。教祖が信者をマインド・コントロールしたためにこのような暴力が発生する。では、いかにマインド・コントロールから身を守るか。カルト予防の取り組みがメディアにも注目された。事実、筆者は自分の大学以外でもカルト予防のオリエンテーションをはじめとする大学の対策を講演でも話し、論文でも書いてきている（櫻井義秀「カルト対策としての宗教リテラシー教育」『現代宗教 2007』国際宗教研究所編）。一大学教師としては、大学構内において摂理をはじめとする正体を秘匿した擬装教団の手に、みすみす学生を渡すわけにはいかない。しかし、宗教研究者としては、もう少し異なったカルト問題の切り出し方が必要に思われる。もっとも、「カルト」概念は主流派からみた文化・宗教的マイノリティへの偏見ではないかとか、「マインド・コントロール」論だけで特定教団への入信を説明できるかといった定番のカルト論争を紹介するつもりはない。問題を抽象化するよりは、事例に則して実質的な宗教論を展開し、現代社会の問題を指摘しよう。

聖神中央教会と摂理を教団として比較してみた場合、指導者による性暴力を除いても興味深い類似点と差異が伺える。

	聖神中央教会	摂理	比較
宗教指導者	主管牧師　神の代理　カリスマ	総裁　再臨主　カリスマ	○
教え	神・サタン→堕落→最後の審判	神・サタン→堕落→救済	○
儀礼・宗教行為	聖霊充満、悪霊抜除、とりなし	祈祷、合同結婚	△
入信経路	伝道、家族・地縁、ノルマ	偽装サークル、勧誘、ノルマ	△
回心の背景	貧病争、生活支援	自己探求、ケア	×
信者の社会層	青年・中高年	学生・青年	×

註　○は類似、△は部分的に類似、×は差異が明らか。摂理に関する詳しい説明は、櫻井義秀「摂理はキャンパスにいる」『中央公論』（2006/10 月号）を参照してもらいたい。

両教団ともキリスト教に連なる以上、主流教派とも教義・儀礼・教会の構造に類似性が認められるのは当然であろう。しかし、指導者崇拝がふつうの教会とは異なるし、説教の語り口から推察する限り、指導者の性情はかなりナルシスティックで、他宗教・他教派批判が多い。彼等は信者からカリスマ（神の賜）があると認められているが、他方で庶民的なくだけた雰囲気も持ち合わせている。それも魅力なのだろう。

教義面では、両教団とも神と堕天使=サタンとの争いを強調する点において福音主義の教会に似ているが、聖神中央教会は神の裁きと地獄の恐怖を信仰強化に用い、摂理は堕落・救援を性と結びつける点において独自である。儀礼に関しては、聖神中央教会では悪魔払いを頻繁に行い、摂理では教祖を囲むイベントで信者達に集団的熱狂をもたらしている。

差異は、入信経路、回心の背景、信者の社会層に認められる。聖神中央教会は街頭のトラクト配布、友人・知人の伝道等で教会名を明らかにしているのに対し、摂理は秘匿する。但し、どちらも主管牧師や教会指導者から伝道のノルマが課されて教会成長を遂げてきた。教会に導かれる人々は、聖神中央教会では従来日本の新宗教に加入していった社会の中下層、主婦が多く、家族や職業上の諸問題を抱え、家族ぐるみの入信者が多い。釜が先や寿町等の寄せ場を宣教地域に含め、他の福音主義の教会同様に社会的弱者の救済を使命としていた観もある。教会執事クラスで生活保護を受給している人達がおり、支部教会において、複数の家族を教会に住み込ませて受給した福祉手当を献金させていた例もあった。

それに対して、摂理はサークルにエリート大学生を加入させ、その信用で他大学の学生をも誘い込むという宣教戦略をとるため、信者は青年層に限られる。彼等はサークルに加入したのであって、当初から宗教や救済に関心があったわけではない。脱会者が語る加入動機は、勧誘してくれた先輩への信頼やサークル・教会の包容的雰囲気であったという。真剣に人生を語り合える友人や集まりを今の大学に探すことは容易でない。真面目で理想主義的な若者がそうしたサークルを求め、また、同じタイプの後輩をケアすることにやりがいを感じていた様子である。心優しき若者達に教祖や組織の裏側は見えないのである。

3　カルト問題と社会層

1990 年代末期から生じたいやしブームのなかで、占いや精神世界への関心も高まり、細木数子や江原啓之といったスピリチュアルなエンターティナーが視聴率や雑誌販売冊数の稼ぎ頭となっている。彼等は賢明にも教祖になる気はなさそうであり、それがまた「宗教嫌い、神秘好き」の現代人に人気を博す理由でもある。古色蒼然の家族道徳や常識をスピリチュアルなオブラートに包みこむだけで商売になる。受容する側がメッセージの中身よりも、雰囲気を求めているともいえる。オウムと昨今のスピリチュアリティ・ブームが精神世界の水脈でつながっていることを考え合わせると、現状に危惧を覚えてしまう。

このような時期に聖神中央教会や摂理の報道がなされたが、それでスピリチュアリティ・ブームに陰りがでた様子はなさそうである。カルトを警戒する人々にすれば、殆ど同じ問題なのだが、精神世界系統のカルト問題と両教団の問題はかなり様相を異にしている。簡潔に言えば、宣教の対象、加入する人達の層がかなり違う。スピリチュアリティ・ブームに関わる層は、自分探しや生きがいを求めながらも、スピリチュアル・グッズや霊感商品、医事法に触れそうな健康法まで幅広い商品を享受できる広範な中間層である。聖神中央教会の信者にはその余裕がない。消費者へと階層上昇することが先決である。摂理の信者は中上層家庭の育ちのよい子弟であり、聖神中央教会の宣教にはのらないだろう。

従来、カルト問題と社会層の関連はあまり考えられてこなかった。しかし、階層分化・固定化が進行しつつある現在（格差社会）、宗教現象と社会層の関連もまた強まってきているように思われる。カルト問題は細分化され、解決の仕方も次第に複雑化してくるだろう。

参考書

１　櫻井義秀『「カルト」を問い直す』（中央公論新社、2006）
２　伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学』（世界思想社、2004）
３　井上順孝『若者と現代宗教－失われた座標軸』（筑摩書房、1999）

用語解説

カルト論争　カルト概念に 3 つの用法があり、用いる人々が異なる。1)神秘主義、カリスマ的宗教指導者による原初的教団（宗教学、宗教社会学）、2)主流派からみた宗教的異端（キリスト教）、3)人権侵害、社会破壊行為を行う教団（マスメディア、精神医療・法律の専門家）。このうち、2 と 3 を用いる人々は、カルトによる精神操作の有害性を訴え、カルトへの介入が必要と考える。1 の学者や一部の人権論者は、「信教の自由」に宗教の中身を問題にすべきではないという原則論を唱え、カルト批判・介入派と鋭く対立している。